

---

# 帰る場所

蒼夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

帰る場所

### 【Nコード】

N3586R

### 【作者名】

蒼夜

### 【あらすじ】

女は何を求めているのか・それは、ただただ小さい、そこからへんに転がっていきそうで転がっていないモノ。

自分を偽って生きていた女が、ある男と出会い成長していく話。

処女作のため文章力はスズメのナミダ程もありません…【サクラの舞うこの場所で】を私事で更新できずに放置状態だったせいか、続きが浮かばないという壁に…更新はまだかまだかと楽しみに待

っている読者の皆様、ちょっとここで、一休みどうぞ。  
待ってねーし！楽しみにしてねーし！だなんて言わずにどうぞどうぞ

【帰る場所】で初めましての方も暇つぶし程度にどうぞどうぞ…！

## 忠告はしました(前書き)

どうぞどうぞ なんて言うておいて、そんなおススメできるものはありません。

自分なりに修正してありますが、文章力のなさに泣けてきます・・

それでもいい、という方はどうぞ。

それは、ちよっと・・・という方・読んでいて不快に感じた方はすぐにお戻りください。

苦情等は一切受け付けません。自己判断の自己責任でお願いします。

## 忠告はしました

ようやく見つけた、私の帰る場所。

けど、それは一時ひとときの幻にすぎなかった

\*\*\*\*\*

「ねえ、そこの綺麗なお兄さん。お金くれない？」

突然、ワタシ不良でカツアゲしてます！みたいな顔の男に声をかけられた。

事実、カツアゲされてるんだけど・・・こういう時は、「ひいッ！あげます。あげるから助けて下さい」と言っただすのか「やだね！他をあたりなッ」と言い返すのか、それとも走って逃げるのか・

返事に悩んでいると、

「おい、聞いてんのか!？」

と怒鳴る不良くん。もう少し待てないかなあ〜と思いつつ、返事をしてあげる。

「うん、聞いているから静かにしてくれないか。考えてるんだから。」

不良くんはその言葉に顔を赤く染め上げ、私の胸ぐらをつかもうと右手をのばしてきたが

そのまま、見事な背負い投げをプレゼントした。

「まったく、人が親切に返事を考えている時に襲い掛かるなんて最近の不良はこれだからダメなんだよな。短気は損気。気は長く持ったほうがいい。あと、さっきの返事だけど答えはNOだよ。こつちもね、カツアゲしたいぐらいなんだよ。身も心も懐も、北極並みに寒くて・・・相手が悪かったね、ドンマイ!!！」

気を失っているのか、起きない不良くんに最後の一言を笑顔で言う  
と公園に向かって歩き出した。

公園につき、ベンチに座って獲物が現れるのをまつ。

30分ぐらい経ってから、6人組みの不良たちが現れた。

「お兄さん。痛い目にあいたくなかったらお金だせや。」

リーダーと思われる男が言うと同時に、他の5人が私の周りを囲んだ。

私は、慌てることもなく平然と言い返す。

「不良くんたち、痛い目にあいたくなかったら素直にお金を出しなさい。」

「はあ？何言ってるの？ふざけてんじゃねえよ!!！」

リーダー（たぶん・・・）の不良くんが顔を狙って殴りかかってき

た。  
それをかわして、隙だらけの顔を殴り返す。

「ぎゃあッ！鼻が・・・鼻が・・・」

逆にやられるとは思っていなかったのか、不良くんたちは呆然とだらしく口をあけている。

今がチャンスとばかりに無防備の不良くんたちを次々に殴り倒していく。

鼻をおさえて、目の前の光景を見ていたリーダーの不良くんにもかって笑顔で問う。

「選んでください。？お金を快く差し出す　？仲間のあとを追うの2つです。」

おススメは「？番で！全部だします。倒れている奴らのも持っていってください。」

そう言うと、素早く自分の財布から三千円をだし、仲間全員のポケットから財布を取り出すとお金だけを

私に渡して、自分だけ一目散に逃げていった。

渡された金額は一万七千円だった。まあまあだと思いつつ、財布にしまいながらコンビニへと空腹を満たすため歩き出す。

## 眼科と精神科へどっこ

コンビニの二軒隣の高層ビルの前で人とぶつかってしまった。

「すみません。」

と、謝罪を口にしながら歩き出そうとしたが

「礼儀がなくてねえぞ。人の顔を見ずにすみませんだど？なめてんのか！」

と怒鳴られ、腕をつかられる。

あと、50mでコンビニなのに！ついてない、ものすくついてない……

「おいッ！聞いてんのか。」

顔をあげて相手を見ると、わたしや○ザです！と自己紹介してもおかしくはない男性だった。

なんて、ついてないんだろう……今日は厄日なのか……でも、星座占いは最下位じゃなかったはずだ……お腹減ってるのに！！コンビニまで50mなのに！！おにぎりが食べたい。サンドウィッチも食べたい。他にもたくさん食べたいのに……

「ガキ相手に何をやっている？」

ビルから出てきた3人の中の1人がしゃべりかけてきた。



ああゝ・・・ご主人様のご登場だ。

私の腕をつかんでいた男が答えた。

「いえ、このガキがぶつかってきたんですけど、謝罪がなっていないもんで・・・」

「そうか。おまえ名前は？」

答えちゃダメだ。かかわるな！！いや、かかわっちゃったけどこれ以上はダメだ。

はやく、コンビニに行って食べ物を買ってお腹を満たしたい。

「ぶつかってしまい、本当にすみませんでした。」

腕をつかんでいる男の目を今度はしっかりと見て言った。

「俺の質問は無視か？まあ、いい。腕をはなしてやれ。」

腕を解放され、そのままコンビニに向かって歩き出したが、突然目眩がして倒れてしまった。

倒れていくなかで、痛いんだろうな・・・最悪だ・・・となぜか冷静に思っ、いつまでたっても、やってこない痛みに不思議に思いつつも意識を手放した。

\*\*\*\*\*

あたたかい・・・ずっと欲しくて欲しくて、でもダメで・・・やっと手に入れることができた。

奪われないように、なくさないように手を伸ばす。

その手をとられて、抱きしめられるかんじがした。

そして、甘く力強い声きこえる。

「俺はここにいる。安心しろ、独りにはさせない。だから、泣くな。」

そんな声が聞こえた。嬉しくて更に涙をながす。

なんだか息苦しくなり酸素を求めて口を開くと、なにか柔らかいものが侵入してきた。

その感触に目を覚ますと、顔があった。それも、半端ない至近距離で。

頭もちゃんと覚醒すると、自分がおかれている状況がわかった。

キスをされているのだ。それも、濃厚で激しく舌を絡めあいながら何度も角度を変えて・・・

あわてて、逃げ出そうと暴れると、すぐに解放してくれたが光に反射して煌めく糸が官能的で相手の顔を直視できない。

「なんだ、キスぐらいしたことあるだろう？それに誘ってきたのはそっちだ。」

「誘った覚えはありません。」

確かにキスの経験はある。だけど、こんなにも気持ちよかったのは

初めてだった。

高ぶる気持ちを落ち着かせて相手の顔を見る。男は、さっきのご主人さまらしき人だった。

「いいや、誘った。今だって色っぽい顔して俺を誘っている。」

「誰が色っぽい顔ですか。眼科と精神科に行くことをおススメします。」

相手は驚いた顔を見ると、お腹をかかえて笑いだした。

「クックク・アハハハハ・・・ツ・・・」

「何がおかしいんですか!？」

「・・・いや、おまえ名前は？」

「教えません。だいたい、ここはどこです?それに、こんな格好をしているんですか?俺の服を返してください。」

「俺の名前は、坂本竜也だ。さかもとたつや服は汚れて、血もついてたから捨てた。その着ているシャツは俺のだ。ブカブカだが、着ないよりはマシだろう。それで、おまえの名前は？」

着ていた服を勝手に捨てたと!やっぱり、精神科に行ったほうがいい。非常識男め!!

「おいッ!いいかげんに名乗れ。」

勝手に服を捨てる、キスはするわ信じられない。でも、お世話になったのは事実だし・・・不本意だけど名乗ろうか・・

「ミサトです。」

竜也は、じつと私の顔をみていたが諦めたかのようにタメ息をついた。

「そのうち、本当の名前を吐かせてやる。ミサトか・・なんで自分のことを俺くというんだ？」

その言葉に私は驚きを隠せなかった。なんで、本当の名前じゃないと分かったんだ。

そんな私の気持ち伝わったのか竜也は目を細めて言った。

「職業がてら、いろんな人間を見て相手をしていると、なんとなくだが嘘かどうか分かるんだよ。それに、なかなか名前を言わなかった奴が簡単に本名を言わないだろうし、ミサトは用心深そうだからな。」

その職業はやっぱりアレなのか？なににせよ、便利だな。

「先程の質問ですが、いろいろと女よりも男の方が都合いいからです。それに、男として振舞っても男にも違和感を感じないでしょう？」

「そうだな。だが、これからは男として振舞わなくていい。あと、敬語もやめろ。」

「なぜです？どうしようが俺の勝手でしょう。あなたに指図される理由と従う理由はない。」

竜也はしばらく私を見つめていたがタメ息をつくとしぶしぶといった感じで言った。

「仕方がないな、好きにすればいい。だけど、敬語はやめろ。そし

て、俺のことは竜也と呼べ。いいな。」

「極力、心がけましょう。ですが、もう癖というか・・・これが俺なんです。」

「少しずついい。それより、昼食にしないか？腹減っているだろう。」

「昼食？？朝食の間違いじゃないのか？そう思い、時計を探す。」

【PM01:24】とデジタル式の時計があった。すごい長時間寝ていたようだ。

口をあけて驚いていると

「よく寝ていたな。俺も久々にゆっくりした。なにか作るが何がいい？たらふく食わせてやる。」

その言葉に反応して、お腹がなる。

「ツクツク・・・ポリウムあるものを作ってやるよ。」

恥ずかしくて顔を背ける。

「なんでもいいです。得意なものでも、簡単なものでも！」

「そうか。とりあえず、ミサトは顔を洗ってこい。」

そういわれて、洗面所に案内された。

眼科と精神科へどうぞ (後書き)

続きは、また明日。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3586r/>

---

帰る場所

2011年4月12日13時59分発行